

明石市

国際協力海外レポート

馬場 金司（ばば きんじ）【JICA シニア海外ボランティア】

赴任地：ガーナ共和国 セントラル州ケープ・コースト市
職種：統計
赴任期間：2014年3月～2016年3月（予定）



○ガーナで見る日本と世界

ガーナでは身の回りのものはほとんど輸入品です。特に日用品は中国製です。車で多いのはトヨタ、日産です。日本のメーカーのほとんどは見るすることができます。アメリカと同じように韓国製の自動車も多く、インドや中国製の車もシェアを増やしています。電化製品は新しいものは韓国製品を多く見ます。とにかく工業製品はアジアが圧倒しています。

日本は先進国の中では貿易比率が小さい国なのですが、自動車産業は大変がんばっています。授業で、日本の紹介として自動車メーカーの名前を挙げたんですが、学生に「YAMAHA」があるとされました。ただし、世界地図を映して日本が何処か訊ねたら、前に出てきた学生はアラスカを指しました。教育を受けた年配の人は、宗教も仏教徒が多いことなど、日本の知識はあります。しかし若い人は、日本の名前は大体知っていますが、日本についての知識はあまりありません。若い教員（日本びいきなのですが…）で、寿司は中華料理だと思っていた人もありました。

ある時、たくさんの鶏肉を入れたケースを頭に載せて運んでいた中学生ぐらいの女の子に声を掛けられたことがあります（その時は私しか近くを歩いていなかったの）。彼女も日本のことは知りませんでした。学校は好きで、算数も好きだと言っていました。勉強を続けることができるのか心配です。

日本人がガーナをチョコレートの名前ぐらいでしか知らないのと同じように、ガーナの人は日本のことを知らないと思った方がよいと思います。ちなみにガーナの主力輸出品はカカオで、ガーナのチョコレートはカカオ 100%ですが、ミルクを少なくしているので、常温でも溶けず、甘みがあまりないので全く別物のように感じます。

○感動すること

こちらに来て一番印象的だったことは、「何でも頭に載せて運ぶ」ことです。50kgのセメント袋も頭で運びます。草刈り用の鉋も頭に載せていました。ミシンを載せていた人も見ました。物売りの人も頭に載せています。大きなものを頭で運んでいるのを見ると、いつも感動を覚えます。物売りのおばさんからバナナを買った時、一人で再び頭にバナナを載せることができないため手伝ったことがあります。生半可な重さではなく、20kgは優にあると思いました。

また、中心地での祭りに偶然出くわしたことがあります。有力者の年配の人を乗せたみこしを各地区で担いでいて、その時は乗っている人しか見ていなかったのですが、後で写真を整理していたら、よく見ると何とみこしを頭で担いでいました。

枕（軽いスポンジのもの）を20個ほど載せて売っている人（大抵男の人）は、さすがに紐をつけてバランスをとっていました。学校で自分の部屋にいと、たくさんのズボンやシャツを載せて売りに来ることがありますが、これはさすがに買ったことはありません。



頭で薪を運んでいる



コトクラバ祭り

以前に私も、頭に物を載せることを試してみましたが、バランスを取るのが大変難しく、一輪車と同じで、子供の時からやらないと無理だと思います。

○恐かったこと

非常に小さなアリが家の中によく入って来るのですが、ある夜、自宅の机で本を読んでいたが、足元に大型のアリがいました。手元の殺虫スプレー（すぐ効く）で退治しましたが、また数匹のアリがやって来ました。後ろを振り返ると、たくさんのアリが何列もの行列を作っています。驚いてスプレーを撒きながら、アリが出てくる 6 畳ぐらいの広さのバスルームを覗くと、床と壁が真黒になっていました。しかも、奥のバスタブの壊れたところから続々と出てきています。アリを踏み、足に上がって来るアリに咬まれながら、進入口にスプレーを撒きました。寝室を見ると、そこにもたくさんのアリが進出しており、スプレー1本はすぐに無くなったので、残りの1本を取りに行き、必死で退治しました。アリの方も驚いて、5分か10分で、後に大量の死骸を残していなくなりました。たくさんの卵が残っていたので、どうやら巣の引っ越し途中で道を間違えたようです。死骸も方々に咬みついているので、汗まみれになりながら1時間ぐらいかけて掃除をしました。寝室のアリを見て、もう寝る所もないと絶望的な気持ちになり、もし他の人が傍にいれば卒倒していたところでした。昔見たヒッチコックの「鳥」という映画を思い出しました。全くホラーです。ガーナの人にこの話をすると、さすがに経験がないようでした。

○戸惑うこと

言葉のせいかな、一般的に大きな声で話します。また、かなり離れた距離から話しかけます。

ある時一人で歩いていたが、向こうから現地語でこっちに話しかけてくる人に気づきました。後ろを見ても誰もいません。しかし知らない人だし、現地語で全く理解できないので戸惑っていたら、その人の後ろの方にいる人も話していることに気がつきました。どうやらその2人が、お互い離れた位置から会話を始め、通り過ぎる時も立ち止まらずに、そのまま振り返ることなく会話を続けていたのです。時々こういう光景を見かけます。

また、彼らは握手が大好きです。普通のあいさつ時にも手を出してきます。特に若者同士ではいつも握手をしている感じがします。中でも戸惑うのは、握手をして手をずらしながらそのまま手をひねって指を鳴らすことです。どうしてこのような握手が広まったのかは謎です。

○帰りたくなること

これはよくあります。現地食が続いてうんざりしたとき。やらねばならないことを抱えているのに、暑くて気力が続かないとき。停電のため懐中電灯の明かりで食事しているとき。寝ているときダニ(?)に数か所咬まれ、パジャマの裏を探しているとき(見つかったことがない)、などなど…。

○ボランティアとしての活動

ボランティアとしての活動は、ケープ・コースト大学で教員をしています。アクラにあるガーナ大学（野口英世記念研究所はここにある）、クマシにあるクマシ大学（工学系が中心）など、ともに規模の大きな国立大学です。敷地は東西に約 2km、南北に 4km あります。学内には校舎、学生寮や農場の他、教職員の住宅が点在しています。その一角に住居を提供してもらっています。

「サイエンスからの遠景」



研究棟の 4 階から南に大西洋が望める。

「サイエンス正面」



科学関係の校舎

「家の前に牛」



農学部農場の牛を、よく校舎の近くに連れてきて放牧している。50 頭ほどを一人で管理している。

職員に聞いた話では、9 学部あり、生物科学系が多く、生徒数はレギュラーが 2 万 4 千人、Distance（通信教育？）が 3 万 6 千人、Sandwich（学期の間に、現地で先生などが受講しているよう）が 1 万 4 千人だそうです。私が今いる生物科学部は 700 人/学年です。外国人の先生もいるはずですが、周りで外国人を見ることがないので、自分が外国人という意識は起きません（言葉を別にして）。

活動は、統計などの教育の他、今は若い人とマラリアの数学モデルを使った課題に取り組んでいます。面白い結果が出ればよいのですが、まだ着手したところです。その他、外部との交流が望まれており、知人をお願いしながら日本の大学とコンタクトを取っています。共同研究などに発展すればよいのですが…。また、日本は留学先として人気があるので、希望が叶うよう奨学金や大学についてアドバイスをしています。

大学では週 2 日は 6 時半からの 2 時間、授業を担当しています。生徒数に比べて教室が少ないので、期中のテストは早朝の 5 時半からやりました。暑いこともあって、とにかく朝は早くから活動します。

「クイズ（期中のテスト）」



朝 5:30 から 2 コース合同で実施。停電のため 1 時間ぐらい待って開始した。

学生はほとんどが寮生です。そのためか、木の下に置いた机で勉強している学生もいます。休日も、朝早くから空き教室などで勉強している生徒をよく見かけます。学生は日本と同じで、優秀な生徒は優秀だし、出来ない生徒はできません。しかし、人懐っこい学生が多く、PC や本を両手に持っている、すぐに手伝おうとしてくれます。(終)

「木陰で勉強中」



湿度は高いが、日陰は凌ぎ易く、ほとんどが寮生のため、日陰を求めて勉強している。

「日陰施設」



このような施設がたくさんある。ここは白板がついていた。日曜日の朝7時前だったが勉強中の学生がいた。

2014/11/9 JICA シニア海外ボランティア 馬場 金司